

大平正芳の政治哲学

香山健一

(学習院大学教授)

はじめに 良買は深く蔵して虚しきが如し

政治家大平正芳が晩年よく揮毫した言葉のなかに、「良買は深く蔵して虚しきが如し」という言葉がある。^① 良い商人というものは、品物を店の奥深くにしまつて店頭を飾りたてたりしないので、一見、店が空っぽのように見える。それと同様に、大人物ほど知識や才能をひけらかしたりしないものだから、なにも持っていない人間のように見えるものだ、という意味である。

この言葉は、『史記』の「老子伝」のなかにある言葉であるが、「良買は深く蔵して虚しきが如し」の後には、「君子は徳盛んにして容貌は愚かなるが如し」という対句が統いている。^② 慎重に言葉を選ぶ合間に発する「アー」や「ウー」という言葉を椰揄するマスメディアの心ない合唱を聞き流しながら、大平はみずからに言い聞かせるような気持で静かに墨を磨り、この若い時代からの座右の銘を書いたのであろう。生涯を通じて読書家、求道者、思想家であつた大平の言葉、発言、文章は、人間と歴史、自然と文明に対する深い思索に満ちた極めて論理的なもので、日本の政治家の文章にはめずらしい高い格調を帯びたものであつた。

「買」とは商人の意である。古くは店のなかに商品をストックして売り買いするものを「買」と呼び、

行商するものを「商」と呼んで区別していたという。のちに、この区別は次第になくなり、ともに商人の意味に用いられるようになった。

戦前、昭和八年（一九三三年）から十一年（一九三六年）にかけての内外情勢激動の時期に、東京商科大学（現一橋大学）に学んだ大平正芳は、「商」や「買」の意味について深く考えることが多かったに違いない。やがて、大平はみずからの人格形成のなかで、「深く蔵して虚しきが如き」「良買」となることをごく自然にめざすようになっていったものと思われる。

大平正芳の墓碑銘には、「君は永遠の今に生き、現職総理として死す。理想を求めて倦まず、斃れて後已まざりき」という言葉が刻まれている。その理想は、人間の生き方としては、「良買は深く蔵して虚しきが如し、君子は徳盛んにして容貌は愚かなるが如し」であった。

大平死して既に十有余年、日本の政界にもなんと「良買」が少なくなってしまったことであろう。いたずらに店頭のみを飾りたてる政商や大衆迎合型の行商人ばかりが、どうしてこども目立つのであるうか。

今、あらためて大平正芳の政治哲学を問いなおすことは、政治哲学を見失って右往左往する日本の政治家たちへの「頂門の一針」となることであろう。ちなみに、「頂門」とは頭の真上の位置を意味し、その部分に針を立てる鍼治療法があるところから相手の急所をおさえて痛切な戒めを与えることをいう。

一、大平正芳の「楢円の哲学」

政治家大平正芳が、その人間の内面に深く蔵しつつ、生涯をかけて磨き続けてきた玉とは何であったのであろうか。それは、大平哲学とも呼ぶことのできる、古今東西の文化遺産を統合した、深く、重厚な人間観であり、世界観であり、歴史哲学であり、政治哲学であった。その大平哲学を私はかねてより「楢円の哲学」と呼びならわしてきた。

平面上において、一つの中心から等距離の点を結ぶと円になるが、二つの中心からの距離の和が等しい点を結ぶと楕円になる。戦後日本が生み出した政治家大平正芳の思想と行動は、円の軌道よりも楕円の軌道を描いている場合が多いように思われる。

過度の単純化のあやまちをおかす危険を承知のうえでいえば、この大平正芳の思想と行動における楕円軌道の二つの中心とは、政治哲学の分野にあっては、東洋の政治哲学の粹である「治水の原理」と西洋の政治哲学の粹である「保守主義の哲学」であったといつてよいであろう。

大平自身が、楕円という言葉を使った最初の演説 記録に残っている限りでは、昭和十三年（一九三八年）正月、新年拝賀式における横浜税務署長としての訓示のなかにおいてである。

当時、二十八歳の大平税務署長は、署員をまえにつぎのように訓示している。

「行政には楕円形のように二つの中心があつて、その二つの中心が均衡を保ちつつ緊張した関係にある場合、その行政は立派な行政と言える。……支那事変の勃発と共にすべり出した統制経済も統制が一つの中心、他の中心は自由というもので、統制と自由が緊張した均衡関係に在る場合、はじめて統制はうまく行くのであつて、その何れに傾いてもいけない……税務の仕事もそうであつて、一方の中心は課税高権であり、他方の中心は納税者である。権力万能の課税も、納税者に妥協しがちな課税も共にいけないので、何れにも傾かない中正の立場を貫く事が情理にかなつた課税のやり方である」³⁾。

この税務署長訓示のなかで述べられている「楕円の哲学」は、大平哲学の原初形態とみることができ。それは、一見、一元論的思考方法を排した二元論的思考のようにも聞こえるが、決して東洋の陰陽道のよくなものでもなければ、西洋の弁証法のような単純な正反合の対立統合の構造でもなかった。それは、近代合理主義の「Aか非Aか」 肉体と精神、理性と感情、神と悪魔、体制と反体制、支配階級と被支配階級、右翼と左翼、資本家と労働者、権利と義務、自由と統制、集団と個人、利己と利他等々と際限なく物事

を二つに分割していく「二分法」(dichotomy) の二者択一的思惟の限界を越えようとするものである。

Aと非Aは実在の世界においては、決して別なものではない。Aは非Aを伴つてのみ実在しうるものであり、非AはAを伴つてのみ実在しうるのである。Aと非Aとを区別する思惟を論理学上、自同律と呼ぶのに対して、Aと非Aは相互に他を前提することなしには実在し得ないと考える実在の論理を相互律と呼ぶ。Aと非Aの緊張関係や均衡が問題となるのは、この両者が相互に他を前提としてしか実在することのできないものであり、実は同じものの両面に過ぎないからである。

『老子』はこのことを、「道の道とすべきは、常の道にあらず。名の名とすべきは、常の名にあらず。無は天地の始めに名づけ、有は万物の母に名づく。故に常に無はもつてその妙を觀さんと欲し、常に有はもつてその微を觀さんと欲す。この兩者は同出にして名を異にす。同じくこれを玄と謂う。玄のまた玄は、衆妙の門なり」と述べ、続いて「美は同時に醜、善は同時に惡」としてつぎのよつに論ずる。

「天下みな美の美たるを知る。これ惡なり。みな善の善たるを知る。これ不善なり。故に有無相生じ、難易相成り、長短相較べ、高下相傾き、音声相和し、前後相隨つ。ここをもつて聖人は、無為の事に処り、不言の教えを行う。万物作りて辭せず、生じて有せず、なして恃まず、功なりて居らず。それただ居らず、ここをもつて去らず」⁽⁴⁾

しかし、大平正芳の楯田の哲学は、老莊哲学から大きな影響を受けてはいるが、それにとどまるものではない。大平は近代合理主義の限界を越えるために、東洋の古典哲学に戻るとともに、『聖書』やトマス・アケイナスの『神学大全』などを通じて、西洋の古典哲学、宗教、神学の原点にも立ち戻ったのである。その結果、若き日の大平が深い思想的影響を受けた内村鑑三などと同様に、大平哲学は東西文化の遺産の壮大な統合という姿勢を持つこととなったように思われる。これについてはのちに再び立ち戻ることとしたい。

大平正芳は、日露戦争直後の明治四十三年（一九一〇年）三月十二日に香川県三豊郡和田村に生まれ、ベネチア・サミットの直前、総選挙のさなかに現役の総理大臣のまま急逝される昭和五十五年（一九八〇年）六月十二日まで、激動の明治、大正、昭和の時代を生き抜いた。大平正芳の波瀾に満ちた七十年の生涯のなかで、東西の政治哲学の調和と融合が描き出す精円軌道は次第に円熟の度を深めていった。

作家の吉田健一氏は、かつて『まろやかな日本』（原題 Japan Is A Circle）のなかで、日本を円（circle）に譬えられたことがあるが、もし氏が大平正芳の政治哲学を観察されたならば、円形ではなく、『精円形の日本』（Japan Is An Oval or An Ellipse）と評されたことである。

「治水の原理」とは、民心は水の如きものであって、強制的にせき止めようとせばあふれだし、自然に道をつければ流れていくものだという東洋の政治哲学の基本をなす考え方である。夏王朝の始祖禹にまつわる故事につきのようなものがある。古代中国の治世の基本をなすものは、治山治水であった。当時、黄河をはじめとする中国大陸の大河はしばしば氾濫し、洪水は天まで達したとさえいわれている。禹の父親は、時の帝堯に命ぜられて治水事業に取り組むが、九年経っても成功せず、やがて処刑されたという。その治水の方法は「涇」という方法で、高い堤防を築いて洪水をふさぎとめるというものであった。水はふさぎとめられれば逆に溢れだそうとし、堤防が高くなればなるほど水嵩も増してやがて堤防は決壊してしまう。氾濫と築堤の繰り返しである。

父のこのやり方では治水に失敗することを見抜いた禹は、「涇」という方法を止めて、かわりに「疏」または「導」といわれる方法を採用する。その方法は、水をふさぎとめようとすることはなく、適当な水路を作つて水の流れたい方向へ自然に誘導するのである。「疏水」という言葉は、こうした故事に由来している。

治水だけではなく、政治もまた同じ原理に基づくものと禹は考えた。民心の流れというものも水の流れ

と同様である。人間の心というものも強権でふさぎとめようとすれば激して逆らい、民意を尊重してその進みたい方向に水路を作れば自然に、自発的に流れていくものである。こうして古代東洋の政治哲学にあつては、「疏」や「導」と呼ばれるような「治水の原理」が、政治の理想とされるようになっていったのである。

「鼓腹撃壤」という故事も、政治を感じさせない政治こそ政治の理想という東洋政治哲学の理想をよく示している。この故事によれば、古代の名君と呼ばれた帝堯が、治世五十年の成果を知るためにおしのびで町に出てみたところ、ひとりの老人が片手で腹づつみを打ち、片手で地面を叩きながら「日が昇れば仕事をし、日が沈めば眠る／井戸を掘って水を飲み／畑を作って飯を食う／おかみのお世話になるものか」と口ずさんでいたといふ。

『老子』は「上善如水」といい、最高の善は水のごときものであると述べている。

若い頃から東洋の古典に親しみ、『老子』『史記』『十八史略』などを愛読しておられた大平正芳にとつて、この政治哲学は戦前、戦中、戦後の歴史の激動の体験を通じて、次第に深みを増していったといつてよいであろう。

昭和十四年（一九三九年）六月から翌年十月までの興亜院蒙疆連絡部経済課勤務のための張家口への赴任と、その後、昭和十七年にかけての再三の中国大陸出張は、大平正芳の東洋政治哲学への認識を一層深めるものとなった。張家口赴任当時、大平は二十九歳であつた。当時、大平と同期の大蔵省昭和十一年入省組の多くが興亜院に派遣されたが、この二年間の興亜院在勤経験と大陸経験を通じて、大平は中国の経済社会の実情や歴史風土、文物、思想について極めて深い認識を持つに至つたものと思われる。大平自身が、『私の履歴書』のなかで書いておられるように、「内蒙古は、満洲、北支、中支、南支と同様、日本の占領地行政の一区画を形成し、中央銀行券も独自のものが流通し、治安はもとより、財政、経済、物価、

為替などについても、一応独立した運営が行われていた。それだけに、張家口での約一年半の滞在は、素朴ながら国家の『原型』⁶⁾ というようなものを勉強するには、またとないよい機会を与えてくれたものだったといえよう。」

この若い時期の在外経験を通じて、その脳裏に刻まれた日本の大陸経営と中国農村社会の現実との矛盾についての自覚は、政治哲学のレベルのみにとどまらず、やがてのちの日中国交正常化交渉の際の、大平の毅然たる政治姿勢や日米関係、日中関係を基軸にした環太平洋連帯構想という政策構想にも通ずることとなる。

一、徳治主義と『為政三部書』

晩年の大平正芳がよく書かれた色紙の言葉に、「任怨 分謗」という言葉がある。いうまでもなく、この言葉は元の張養浩の名著『三事忠告』（安岡正篤訳『為政三部書』として知られる）のなかの「廟堂忠告」の言葉である。

政界一の読書家といわれた大平の愛読書のひとつが、この『為政三部書』であったことはよく知られている。神渡良平著『安岡正篤の世界』は、「大平の自宅が安岡の自宅に近かったこともあって、大平は朝の散歩がてらに気軽に安岡のところへ寄っていた。別段用事があるわけでもなかったが、そうした目的のない雑談に大平は大いに解放されていたのである」と書いている。

また牧野伸顕、吉田茂、池田勇人氏らが師事した安岡正篤氏が、中国後漢の馬融の故事「高光の樹に休息し、以て宏池に臨む」にちなんで、池田派に「宏池会」という名をつけたことはいまさらいうまでもない。しかし、大平が安岡の著書に親しんだのは、宏池会以後のことではなく、実は学生時代からのこ

とであった。安岡の高弟林義之氏の『安岡先生動情記』には、昭和三十四年三月某日、「大平正芳氏飄然先生を訪問、当時大平氏の自宅は先生の白山下の住居の近くにあつたので、それを理由にしてとのこと、用談というほどのことはなく、学生時代より先生の書物は殆ど読んでいることなどを話して帰る」と記録されている。

「廟堂忠告」は、「修身」 身を修めること、「用賢」 賢者を用いること、「重民」 民を重んずること、「遠慮」 先々に心すること、「調變」 調え和らげること、「任怨」 怨みを受けて恐れぬこと、「分謗」 同僚の謗を我も分かつこと、「応変」 変に應ずること、「献納」 忠言を奉ること、「退休」 いつやめるか、の十項目の忠告からなっている。

『大平正芳 人と思想』の第四十章「召命」、第四十一章「永遠の今」に記述されているように、大平正芳の人生の最後の時は、「退休」 いつやめるかを考えるいとますらないほどの苛酷なものであつた。昭和五十五年（一九八〇年）五月十六日、自民党反主流派の欠席による大平内閣不信任案の可決から、内閣総辞職、衆院解散、衆参同日選挙決定、そして参議院選挙告示日の五月三十日、街頭演説で倒れられ、六月十二日に召命されるまでの一月の精神的緊張は人間の耐えうる限界を超えていたものといつてよいであろう。ベネチア・サミットを目前にした総選挙のさなかに、病床に伏しながら大平は、「任怨 分謗」と自らに厳しく鞭打ち続けておられたことである。

病室を訪れた旧友に、「得病更知旧友情 明常思長夜之愁」という漢詩を書かれたのもこうした精神的緊張の極限状況のなかの束の間の静けさのなかにおいてであつたものと推察される。「長夜」とは、仏語で凡夫が煩惱のため悟ることができず、迷いから逃れられないことを意味する。

『大平志げ子夫人を偲ぶ』のなかにも書き記しておいたことであるが、私が大平総理と最後にお会いしたのは、衆参同日選挙のための街頭演説で倒られる前日の五月二十九日のことであつた。この日の午後

四時半から、大平総理を囲む政策研究会のひとつ、家庭基盤充実研究グループ（座長・伊藤善市東京女子大学教授）の最終会議が官邸会議室で開催され、午後五時には座長から総理に「家庭基盤充実のための提言」と題された報告書が提出された。この最終報告書の提出に引続き、いわば同研究会の打ち上げのような形で、午後五時半から、総理官邸中庭に面した広間で簡単な懇親会が開かれたのである。この懇親会は、家庭の大切さを提言する研究会の最終報告に相応しく、委員だけの会合ではなく、和気あいあいとした家族づれの集いにしたいという総理と座長、委員たちの考えに従って官邸や政策研究会の歴史では前例のない懇親会となった。総理も志げ子夫人や森田一秘書官夫妻を伴って出席されたが、この席でも総理は他人の悪口を一言も口にはされず、「忙中閑あり」とこの家族団欒のひとときを楽しんでおられるような風情でさえあった。私は前年の夏、一般消費税の問題をめぐって瀬田の私邸で総理におめにかかった際の、内蒙古張家口滞在の頃の昔話と元の張養浩の『為政三部書』との出会いをめぐる話題が一瞬頭をよぎった。池田内閣の官房長官としての、「寛容と忍耐」という内閣のキャッチフレーズから「任怨 分謗」に至るまで、政治家としての大平正芳の一生を貫いている政治哲学のひとつの中心は、東洋の政治哲学であり、「治水の原理」であり、徳治主義であった。

三、トニーの『獲得社会』とトマス・アクィナスの『神学大全』

昭和三年、大平正芳が十八歳の年に高松高等商業学校に入学した春、一橋の上田貞次郎先生門下の大泉行雄教授が高松に赴任してこられ、商業学やオイケンの経済学を講じて、学生の人気を集めていた。大平自身、『私の履歴書』のなかでこのことに触れておられるように、オイケンの経済学との出会いが、やが大平の東京商科大学入学へも連なっていくことになる。のちに大平自身が回想しておられるように、一

橋大学は大平の思想形成、人間形成にとつてもかけがえのない重要文化財であった。政策論の面からみても、このときの中山伊知郎助教、恩師シュンペーターの流れを汲む新進気鋭の純粹経済学者との出会いがやがて池田内閣時代の所得倍増論へと連なつていったことはよく知られている通りである。

『私の履歴書』のなかで、大平は東京商科大学時代のことについて、つぎのように回想しておられる。「一年のときのプロゼミナールでは、経済地理と商品学を講じておられた故佐藤弘教授の下で、「自然と人間の交互作用」をテーマに勉強した。……必修課目のほか、私は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生の法律思想史など、手当たり次第に、欲張つて受講することにした。私にとつては、いずれもが難解であつたが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚えるようになった。二年になつてからの本ゼミナールを、上田辰之助先生にお願いすることにした背景には、そういういきさつもあつたのである。

上田先生は、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがつて、先生のトマス・アクイナスの研究その他のお仕事も、その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであつた。

ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トニーの英文自体の言語社会学的な説明を教わつた。⁽⁹⁾

昭和十一年（一九三六年）の大平正芳の卒業論文の論題は、「職分社会と同業組合」というものであつた。この論文は、大平の政治哲学の形成過程を理解するうえで欠くことのできない重要な文献である。『大平正芳回想録』（追想編）に寄稿された一文のなかで、当時の一橋大学学長宮沢健一氏が指摘されているように、この大平正芳二十六歳の春に執筆された卒業論文は、「大平哲学のふるさと」と呼ぶこともできる興味深い内容のものであつた。⁽¹⁰⁾

この論文は、全文三百七十頁からなるもので、「小序」、「本稿の構成と参考文献」に続いて、「第一編 トーニー（原文ではトーナーであるが、トーニーに表記統一、以下同様）の職分社会論（イ）権利と職分、（ロ）獲得社会論、（ハ）職分社会論、（ニ）トーニーの学説の時代的意義」、「第二編 アメリカの同業組合論（イ）同業組合の概念規定、（ロ）同業組合の史的発展、（ハ）同業組合の組織、（ニ）同業組合の内部行政、（ホ）同業組合のアメリカ産業機構に占める地位」という内容で論旨が展開されている。

この論文が、前述の『私の履歴書』にもあるように、上田辰之助ゼミナールにおける R・H・トーニーの『獲得社会』(R.H.Tawney: The Acquisitive Society, 1921)⁽¹⁾の原書講読を基礎としながら、その時代的意義を考究しようとしたものであることは明らかである。

小序のなかで、大平正芳はつぎのようにこの論文の意図するところを明らかにしようとしている。「上田辰之助先生の研究室の門が私に開かれてから最初に御指導をうけつつ読んだ書物はトーニーの『獲得社会』であった。そこにはトーニーが彼の卓越せる着想と豊富なる経済史的蘊蓄を傾けて、中世的協同社会が如何なる必要により如何なる過程を経て崩壊せしかを明らかにし、その廃墟に芽ばえた資本主義社会がその本来の成立条件を忘却して如何に個人絶対乃至は権利本位の社会に推移して行つたかの経路を描写している。彼はかくしてあらゆる障壁を踏み越え守るべき限界を無視して発展し分裂したる資本主義社会を社会職分の光に照らして分析批判し其諸弊悪を暴露し併せて来るべき社会は如何なる嚮導理念を支柱として組立てらるべきかに対し示唆を与えている。

分観的機械論と権利本位思想の所産たる自由競争も階級闘争も共に社会を混乱に陥れ、資本主義社会の退廃現象は覆ぶべくもなく私共の眼前に露呈されている。所謂近代精神はその往くべき処を行きつくし、今や新たな転回を余儀なくせしめられつつある。思想の対立葛藤、そこから生ずる社会の混乱紛糾は人々を駆つて不安と混乱の巷に追ひやりつつある。ここに於いてこの対立を止揚せる全体、分裂を克服す

る統一、闘争を越えた協調が要望されるのは歴史の必然の歩みでなければならぬ。かかる客観的情勢に
 圍繞されて私はトーニーを纏いたのである。そして豊富にして該博なる経済史実を駆使して織りなす彼の
 流麗なる行文と辛辣なる皮肉とは私を魅惑してしまった。私は彼に刺激されて「全体と部分との関係」を
 経済史的に或いは社会史的に考察せんとする希望と欲求を抱き且つそれを考えるについての訓練を受け
 た。¹²

だが、大平はトーニーから多くのものを学びつつも、それに満足することはできなかった。なぜなら、
 トーニーの著作は、「新たに職分社会の構成を提示すると言つべきものではなく、それと対蹠的立場に立
 つ権利本位の社会の諸々の弊害を歴史的に闡明し且之を暴露せんとするが如きものとつけとれたのであ
 る。従つて、私は彼の所論を通じてその背景をなす協同体社会の目的は何かその身分的構成はどうか或い
 は又それと国家との関係はどうか等については遂に学びとる事が出来なかつた」¹³からである。

トーニーの『獲得社会』の研究を媒介として、大平の研究関心はトーニーがその崩壊過程を論じた欧州
 中世の経済社会に移行する。当時、上田辰之助教授は、「中世の輝ける聖者、古代文化と基督教精神との
 明快にして透徹せる折衷者」、トマス・アキナスの政治経済学説を中心として、「欧州中世経済学説史」
 を講述していた。こうして、大平は中世最大の思想家といわれるトマス・アキナスと出会い、トマス・
 アキナス研究を通じて一方で近代産業社会を超える視点を把握し、他方で西欧のキリスト教的世界観の
 本質的理解に迫ることとなるのである。

大平はこの間の事情を先の論文のなかでつぎのように書いている。「かくて幸いに私はトマスの深遠な
 る思想に接する機会を他の学生の誰よりも多く与えられた。偶々私個人としても或機縁からキリスト教に
 親しむようになり、それに関する各種の文献を研究していたので、トマスの思想は異常なる興味と言わん
 よりも教養上の切実なる要求として私に迫つて来たのである。かかる好条件に恵まれて上田辰之助先生の

トマスに関する諸々の文献を續くにつれて、トマスの大なる体系が次第に明瞭なる姿を以て腦裏に描かれて来た。殊にその政治經濟思想の根幹をなせる社会職分の原則が、その背景をなせる協同体の目的並びに構想との関連において理解されかけたのである。そして又トマスに於ける社会の重要な屬性たる目的論的秩序、自発的義務的職分意識、其結果として顕現される協調と平和等の諸々の特長が、権利本位思想によつて分裂し個人的利己主義によつて腐敗せる現時の社会に於いて、顧みられ憧憬される所謂「中世紀的協同体への復帰思想」の台頭せる意味もよみとる事が出来るようになった。かくして私が疑問としていたトニーの所論の背景が、トマスを学ぶことによつて、歴史的且立体的に捕捉されるようになった。他面、トマスの政治学説ならびに經濟学説の現代的意義が逆にトニーの労作を通じて把握されるものと信ずるに至つた⁽⁴⁾。

ここでトニー並びにトマス・アクイナスについて、若干の解説を加えておくことは、この二人の著作が大平正芳の思想形成過程において与えた影響を正確に測定するうえで多少は役立つものと思われる。

リチャード・ヘンリー・トニー (Richard Henry Tawney) は、一八八〇年カルカッタに生まれた。父は当時、インド州立大学学長の地位にあつたC・H・トニーであつた。つまり、彼はベヴァリッジ計画として知られる社会保障制度の創設者、經濟学者ベヴァリッジ卿らと同じく、優れたアングロ・インディアンズの家系に生まれたわけである。

一八八一年代といへば、植民地帝国英国の内部においてもようやく近代産業社会のさまざまな歪みが顕在化してきた時期であり、ヴィクトリア時代の進歩への樂觀主義は完全に消え去ろうとしていた。インドの民族運動は、国民会議派を中心に反英・反植民地主義の性格を強め、アフリカの南端はポア戦争に向かつて対立を激化しつつあつた。植民地生まれのトニーは、こうした大英帝国の衰退過程に極めて敏感であつた。一八八四年には、英国にフェヒアン協会が生まれている。

ラグビー校からオクスフォード・ベイリオル・カレッジに進学したトニーは、やがて近代の貧困の由来を探究したトインビーの『産業革命史』やロンドンの労働者生活の実態調査をまとめたブーアの『ロンドンの民衆の生活と労働』（全十七巻）などの影響を受けながら、産業革命後に「世界の工場」となった大英帝国の繁栄の蔭に広がる新しい近代的貧困の社会科学的解明と貧困を解決するための社会活動に参加する。ロンドンのセトウルメント・トインビー・ホールには、ベイリオル・カレッジの出身者が多かったようであるが、一九〇三年にはベヴァリッジが副主事として赴任し、彼の同級生であったトニーもここに住むようになる。

グラスゴー大学、母校オクスフォード大学などに教鞭をとり、その間、処女作『十六世紀における農業問題』を発表したのち、第一次世界大戦に従軍して重傷を負い、復員したのち戦後社会の人心をとらえたといわれる社会評論『獲得社会』を発表することとなるのである。その後、トニーは、『英国労働運動史』（一九二五年）、『宗教と資本主義の興隆』（Religion and the Rise of Capitalism 一九二六年）、『平等』（一九二九年）そして『ジェントリーの勃興』（一九四一年）などの諸著作を相次いで発表する。特に、『宗教と資本主義の興隆』は、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と比較して論じられることの多い著作である。一九三一年には、ロンドン大学経済史担当教授に就任、就任演説の演題は「産業問題としての貧困」であった。一九二九年には太平洋問題調査会の委託を受けて、広範囲にわたる満洲、中国問題の調査報告をとりまとめ、さらにその翌年には国際連盟の委嘱を受けて、再度中国の教育制度の視察を実施している。一九四二年に刊行された『中国の土地と労働』は、カルカッタに生まれ、大英帝国の植民地政策を身をもって体験してきたトニーのこうした中国社会調査結果をまとめたものとして興味深い。

大平が東京商科大学に学んだのは、先述のように昭和八年（一九三三年）から昭和十一年（一九三六年）

にかけてであったので、矛盾と退廃を見せ始めた近代産業社会の将来に関する英国の経済史学者トニーの諸著作が、最も新鮮な内外の関心を引きつけていた時期でもあった。大平正芳の人生の十代終りから二十代初めにかけての時期は、文字通り第一次世界大戦と第二次世界大戦には生まれた戦間期の激動の時代であった。ちなみに、年表を繰ってみると、主要な出来事だけを見て、昭和四年（一九二九年）世界大恐慌（大平、十九歳、以下括弧内はその年の大平の年齢）、昭和五年（一九三〇年）昭和恐慌（二十歳）、昭和六年（一九三一年）満州事変勃発（二十一歳）、昭和七年（一九三二年）五・一五事件（二十二歳）、昭和八年（一九三三年）ヒトラー独政権を掌握、日本、国際連盟脱退（二十三歳）、昭和十一年（一九三六年）二・二六事件、スペイン内戦（二十六歳）、昭和十二年（一九三七年）蘆溝橋事件、日独伊防共協定調印（二十七歳）というような不安定極まる時代であった。

大平はその卒業論文のなかで、「かかる客観情勢に囲繞されて私はトニーを纏いたのである。そして豊富にして該博なる経済史実を駆使して織りなす彼の流麗なる行文と辛辣なる皮肉は私を魅惑してしまつた」と書いて、その著作から受けた強い刺激を率直に述べている。

トニーが『獲得社会』（The Acquisitive Society）と呼んだものは、必ずしも歴史的に明確な規定を与えられた社会体制ではないが、その内容は近代産業社会の在り方、その宗教、倫理から社会組織、生活様式にいたるまでの根幹に関わる批判であった。表題の Acquisitive は、「利欲的な、取得的な、修得的な、獲得的な」などという意味を持つ言葉であるが、著書の内容からすれば『利欲社会』とでも訳した方がより原意に近いであろう。戦後の訳書では、『強欲な社会』という訳語も用いられているが、この表現には逆に価値判断や感情が入り過ぎて思うように思う。

トニーはのちに『宗教と資本主義の興隆』の一九三七年版の序文や、同年に書かれた「キリスト教と社会秩序とに関する覚書」などのなかで、彼が『利欲社会』と呼んだ近代産業社会の性格を次のように論

じている。財産とはもともと人間の社会的目的に奉仕するという機能を持つべきものであり、人間の創造的活動に対するひとつの手段であるべきなのに、近代産業社会ではこの関係が逆転して、財産は人間の創造的活動から遊離し、遊離した財産がかえって人間を手段として用いている。ここでは財産はその本来の機能を失い、これに駆使される人間は二つの層に分離する。そして財産所有者と労働者との分離と対立が進行する。ここからトーニーは近代産業社会のこつした矛盾の解決を、彼のいう「職能社会」(Functional Society) 大平論文では「職分社会」に求めようとするのである。

トーニーによれば、「職能社会」においては人間はその社会的職能を果たすために、何らかの専門的職業団体を作り、めいめいは自分の職能を誇りと責任を以て遂行する。そのとき社会はprofessionalismと呼ぶことのできるような体制を持つこととなる。財産に対して根本的な反省を行えば、財産には人間の創造的活動によつて生じるものと、人間の活動とは無関係に生じるものとの区別があることに気づくであろう。前者は私有さるべきものであるが、後者はそうであつてはならない。私有さるべきではない財産は、社会的な人間活動の場である社会そのものに、具体的には社会を代表し、構成するところの公的な団体に帰属すべきものである。

トーニーはこのように近代産業社会を超える改革の方途を模索しながら、その根底に一貫して中世キリスト教会の理想であり、近代初頭のヒューマニスト、改革者たちが求めていたものを置いていた。『宗教と資本主義の興隆』のなかで、トーニーは次のように言つた。

「十七世紀の後半から物質文明が姿を変えつつあつた。実践的な精力と技術的な熟練のあのすばらしい成果をかえりみるときに、心に一陣の涼風を覚えぬものはまずあるまい。……しかし経済的欲望というもの、下僕としては役に立つが、主人となれば悪いものだ。社会的目的にしっかりとつながれて使われれば、それは水車を回し、粉も挽こつ。だが、なんのために、車はまわるのか、という疑問は相変わらず解

かれていない¹⁶⁾。近代社会におけるこうした価値の喪失と主客の転倒について、見直されなければならぬのは中世における宗教と政治、経済、社会の関係であり、中世思想であるとトニーは考えるのである。大平は、このトニーの『獲得社会』の原書講読を通じて、英国産業社会の内部に進行しつつあった近代社会の諸矛盾に注目し、中世の宗教と経済の關係に深い関心を寄せながらも、トニーの「職分社会」や「同業組合」論だけでは、近代を超える解決策にはならないことを鋭く見抜くのである。大平はトニーの立論の背景にある中世の経済社会を尋ねて、やがてトマス・アクィナスの研究に本格的に取り組むこととなる。そしてこのトマス・アクィナスとの出会いこそが、大平の西欧理解、キリスト教理解、近代産業社会に対する理解に決定的な深みと重厚さを与えることとなるのである。

よく知られているように、トマス・アクィナス(S. Thomae Aquinatis)は中世欧州哲学の最も偉大な代表者であり、中世における最も建設的かつ体系的な思想家である。彼の歴史的な著作である『神学大全』(Summa Theologiae)と『護教大全』(Summa Contra Gentiles)という二つの『スムマ』は、中世のカトリシズムを鼓吹し、ダンテの『神曲』のなかにその最高の芸術的結晶を見出したといわれているものである。トマス・アクィナスは『神学大全』のなかで、自然法について次のように述べている。

「世界が神意によって支配されるものと想定するならば、……宇宙の全団体が神的な理性によって支配されるといふことは明らかである。かかる、神にあっての、被造物の合理的な導き……これをわれわれは永久法と呼ぶのである。」「神の摂理に服する万物は、永久法によって規制され測定されるのであるから、万物が、それぞれに固有の行動や目的に向かう傾向を永久法の刻印から得る範囲で、或る程度永久法に参与するといふことは明らかである。」「しかるに、理性的な被造物は、他のすべての物と異なり、きわめて特殊な仕方ですべての神の摂理に服する。すなわち、彼等は自己の行為や他者の行為を統御することにおいて、彼等自身摂理そのものへの参与者とされる。そこで彼等は永久の理性そのものの分け前に与かり、それによ

り、適当な行為や目的に向かう自然の傾向を得ることになる。かかる、理性的な被造物における、永久法への参与が、自然法と呼ばれる。かくて、ダヴィデ王が「正義の供物を捧げよ」と誦したとき、彼はあたかも正義の供物は何かと問われているかの如く、「多くの人は言う、たれか善きことをわれらに見するものあらんや」と付け加え、そしてそれに答えて、「エホバよ、願わくは聖顔の光をわれらの上に昇らせ賜え」と述べたのである（詩篇第四篇第六節）。あたかも、自然の理性の光 それによってわれわれは善と悪とを識別するのであり、それは自然法であるが、神の光の、われわれに対する刻印にほかならぬ如くに。そこで、自然法が理性的な被造物における、永久法への参与にほかならないということは明らかである。¹⁶⁾

大平のトマス・アキナスとの出会いは、大平の思想形成にとって極めて意味深いものであった。

第一にそれは大平の若き日のキリスト教との出会いの宗教体験を自己の内面から再考し、意味づける貴重な機会を与えることとなったからである。大平が身震いを覚えるような知的興奮を感じながら、トマス・アキナスの世界、西欧中世の宗教と生活が一体であった時代の歴史にのめり込んでいった状況が眼に浮かぶようである。

大平は『私の履歴書』のなかで、キリスト教との出会いをこう書いている。

「私が高商に入学して間もなく、工学博士佐藤定吉先生が来高し、講演を行われた。演題はたしか「科学と宗教」であったかと思う。佐藤博士は東北大学の教授をやめられてから、「イエスの僕会」という学生団体を全国的に結成して、科学を通してみたキリスト教の伝道に専念されていた。キリスト教は、私にとって全く無縁の世界であった。ところが、どうしたものか佐藤先生のお話に感動し、その夏は浅間山麓の研修会に参加したり、秋には青山の青年会館における全国大会にも出席するほど夢中になってしまった。そればかりか、同志とともに、しばしば東京や高松の街頭に立つて、信仰の告白することも辞さないようになつていた。

しかし、佐藤先生の所説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立つが、その神がなぜ「愛」であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水的な役割を果たしたものだ。

私の場合も、その後聖書を通してキリスト教に進んだ。もつとも、洗礼を受けた観音寺の教会以外には、特定の教会と関係をもつことなく、内村鑑三先生をはじめとして、その門下の塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里等の諸先生の著作に親しんだ。矢内原忠雄先生には後日、大学に進学してからのことであるが、自由ヶ丘のお宅の「聖書研究会」に参加させていただき、直接教えを受けた。

また、そのころ東松原のご自宅で、聖書の講義をされていた賀川豊彦先生のところにも、学友梅野典平君と一緒に伺って聴講し、先生心づくしの昼食をいただいたりしたものである。⁽¹⁷⁾

このような宗教体験、社会運動体験を経てきた大平にとって、トニーを通じてのトマス・アクィナスとの出会いは運命的なもののようにさえ思える。大平はその卒業論文の小序の結びの部分でこう書いている。「聖トマスが今日に於いても尚顧みられ尊重される所以は彼の学説が極めて秀逸であり今日に於ける問題に対する貴重な示唆を含蓄していると言っただけではなく、彼の学説乃至はそれを通じて顕現される、彼の人格の教育的価値が比類なきものである為であろうと信ずる。かくてこそ真に古典の名に値する古典たる資格があるものと考える。」

第二に、トマス・アクィナスとの出会いによって、大平は中世の自然法思想、中世の経済社会道徳を深く学ぶこととなった。それは大平にとって二つの重要な意味を持つこととなった。ひとつにはそれを通じて、大平は経済学における自然法思想の発展ともいべきアダム・スミスの「神の見えざる手」の意味それは単に「利欲」のみを目的とするものではあり得ないを真に深く認識することとなり、それはやが

て確固たる市場経済、経済道徳を伴った自由主義経済への信念と結びついていくこととなる。同時に、この中世の自然法の深い認識こそが、先に述べた東洋の古典哲学と融合して、やがて大平独自の真の保守主義の政治哲学へと次第に昇華していくことになるのである。

第三に、トマス・アクィナスとの出会いによって、大平は中世の経済社会を深く理解するようになり、そこにおける宗教と社会の結びつき、個人と国家の結びつき、部分と全体の関係について深い認識を得るようになるが、この中世経済社会の認識は近代産業社会の限界や矛盾を超える方向を模索するうえで、のちに大平にとって貴重な思想的財産となるのである。

四、人間的連帯の回復と田園都市国家の建設

タイムトンネルを通過するかのように、大平の時系列的な思想形成過程の考察の途中経過を飛ばして、大平の政治哲学を考察するレンズの焦点を一举に卒業論文から三十五年後の昭和四十六年に合わせてみることにしよう。

この年の四月、前尾繁三郎会長のとを継いで、宏池会の第三代会長に就任して自民党総裁公選に立候補しようとした大平は、九月の宏池会国会議員研修会において、「日本の新世紀の開幕 潮の流れを変えよう」という歴史的な政策提言を行った。

その冒頭で、大平は次のようにその時代認識を述べている。

「わが国は、いまや戦後政治の総決算ともいっべき転機を迎えている。これまでひたすら豊かさを求めて努力してきたが、手にした豊かさの中には必ずしも真の幸福と生きがいが見えられていない。ためらうことなく経済の成長軌道を力走してきたが、まさにその成長の速さの故に、再び安定を指向せざるを得な

くなった。なりふりかまわず経済の海外進出を試みたが、まさにその進出の激しさの故に、外国の嫉妬と抵抗を受けるようになった。⁽¹⁹⁾

この経済成長のパラドックスについての叙述は、トニーが英国における近代産業社会の発展がもたらしたパラドックスを論じた『獲得社会』の論調とどこかで深く共鳴しているような響きがある。この近代産業社会のパラドックスを超える処方箋はどこにあるのか。大平はこれをまず、「人間的連帯の回復」に求めようとする。「人間的連帯の回復」とは何か。それは、大平によれば、近代産業社会が見失った人間的価値の再発見であり、再確立でなければならない。

大平は、昭和三十年代から四十年代半ばまでの戦後経済成長期を終えた直後の時期を見定めつつ、この「人間的連帯の回復」という一見抽象的に見える課題を真正面から次のように提起したのである。

「戦争と欠乏から解放された国民は、戦争や欠乏によって支えられてきた秩序からも解放されつつある。経営と労働の間だけでなく、老人と若者、上司と部下、教師と学生、医師と患者、その他人間関係一般に、ある種の断絶と相克が生まれつつある。これはわが国に特有のことではないが、わが国においては、敗戦による価値観の転換に加えて、経済の高度成長に伴い、経済構造の変化とりわけ核家族化の速度と規模が、特に激しかった。それだけに人間関係における動揺の振幅もまた大きいものがある。産業設備や公共施設が地域住民と摩擦をおこしている例も少なくない。また貧困者、高齢者、病弱者が繁栄の陰に取り残されがちである。これらのことはすべて国民的連帯感の弱化に起因するものであり、国家存立の基礎を掘り崩すものとなる。」

われわれはこのような事態を最も憂慮するものである。

平和と豊かさの中に、分別をもった連帯感の横溢した人間を、いかにしてつくり上げていくか。それは政治の最大の課題であり、教育の基本的任務であらねばならぬ。……また、その道標は、人間的な連帯感

の回復であり、その方向は、同族的連帯から地域的なそれへ、地域から国家へ、国家から国際へ、と進む連帯感の発展でなければならない。

そのためには、自他に対する甘え、無気力、無関心、絶望やエゴイズムをしりぞけ、より高い連帯価値に向かつて、われわれの内発的なエネルギーを引き出すことである。わが国民は、老若男女を問わず社会的な価値の創造に参加し、真の生きがいを見出したい願望に駆られている。そうした国民の思いに道をつけることができずはじめて、われわれは、政治家としての尊い役割を果たすことになるのである。²⁰

「人間の連帯の回復」、「社会的な価値の創造への参加」こそ「政治の最大の課題」であり、それこそが「政治家としての尊い役割」であると説く大平のこの演説には、キリスト者として街頭に立ち、トニーやトマス・アクィナスを通じて経済活動と人間の価値の分裂を克服しようと思案し続けた若き日々²¹の求道者としての大平の真摯な姿が、老成した風格を帯びて浮かんでくるのである。

政治の最大の課題は決して物質的豊かさの追求のみにあるのではない。豊かさの中の精神的、文化的貧困こそ最も憂慮する事態でなければならない。トニーが『獲得社会』と呼んだもの、経済道徳を欠いて利欲の追求のみに走る社会は心貧しきものである。それは人間の内面の豊かさを破壊し、人間と人間との心の触れ合いを断ち切り、社会有機体を瓦解させる。この人間関係の断絶と解体を克服することこそ、政治家の基本的な使命でなければならない。

大平はそのための具体的処方箋を「田園都市国家の建設」に求めようとする。大平は、先の演説を次のように続けるのである。

「民間設備投資を軸としたわが国のこれまでの経済成長政策は、いちじるしい成果をあげたが、他面外にわたって多くの衝撃波をもたらした。われわれはまず、これらの衝撃波を緩和し吸収する施策を早急に進めねばならない。

国民生活はいまや公害、物価、交通等の面で、不安と緊張が高まってきた。国民は、物質的な豊かさを無限に追求するよりも、むしろ精神的にゆとりのある安定した生活を望んでいる。したがってわれわれは、この国民の希望にこたえ、この四つの島に、自然と調和したバランスのとれた人間社会をつくり出さなければならぬ。

それは激しい都市化傾向を防ぎとめる自動復元装置を持ち、農村と都市のメリットが調和した形で活かされる社会である。すなわち農山村に住みよい環境と就業機会を作り、これを豊かな田園に変え、その田園を都市にも導き入れた、いわば新しい田園都市国家である。この田園都市国家は決して今後の経済成長を否定するものではない。それは相互に相補う生産性の高い工業と農業が、また都市と農山村が高次に結合された社会である。……また田園都市国家は無数の個性的な地域社会によって構成され、これを有機的に統合したものである。地域によってその要求はきわめて多様であり、画一的なおしつけは許されない。……このような国家の実現は決して不可能なことではない。これを一億の人口を持つこの四つの島の上に実現するのが新しい世紀に対するわれわれの挑戦なのである。⁽²⁾」

この昭和四十六年の宏池会会長としての政策提言は、「人間的連帯の回復」をより具体的に「都市と農山村」の調和の回復のなかに求めようとしたものである。そこには、大平の卒業論文の問題意識であった「全体と部分との正しき関係如何」というテーマへの経済社会学的接近という問題意識が、三十五年という歳月を経てなお脈脈と流れていることを知るのである。大平は三十五年前の昭和十一年、卒業論文のなかにこう記している。「かかる研究は私をして全体と部分との関係を熟察する機縁をもたらし、個人の社会に対する正しい結び付きを教へ、或いは更に進んで全体の為に殉ずる精神を培養する上に与かつて力あるものである⁽²⁾」。

大平が「田園都市」という言葉を明確に意識したのは、恐らくは大蔵省に入省した直後のことであろうと考えられる。大平内閣時代に首相の私的諮問機関として設置された九つの政策研究グループの一つである「田園都市構想研究グループ」の報告書が詳しく述べているように、「田園都市」(The Garden City)という言葉がわが国にはじめて本格的に紹介されたのは、明治四十年(一九〇七年)にまとめられた内務省地方局有志編の報告書『田園都市』によるといってよいであろう。大平の生誕する三年前のことである。その後、この報告書は内務省、大蔵省をはじめ各省への入省者たちの間でかなり広く読まれ続けてきたといわれる。^(23,24)

そもそも、田園都市に関するエベネザー・ハワードの最初の提案は、一八九八年(明治三十一年)に『明日 真の改革に至る平和な道』(Tomorrow)と題された著作において試みられ、ついで一九〇二年(明治三十五年)に『明日の田園都市』(Garden Cities of Tomorrow)の書名で僅かに改定されて出版されたものである。⁽²⁵⁾

ハワードの提案に賛同した人々は、一八九九年に田園都市協会を創設して田園都市構想の実現に着手し、一九〇三年(明治三十六年)には、第一田園都市株式会社による最初の田園都市レッチワースがロンドンの北四十一マイルの地に建設されるに至った。また、一九〇五年(明治三十八年)には、A・R・セソネットの『田園都市の理論と実際』(Garden Cities in Theory and Practice)も出版されている。

「田園都市」(Garden Cities)という名称は、ハワードがはじめて使った新造語というわけではない。豊かな自然環境に恵まれた都市という一般的な意味において、この言葉はもともと古くから広く使用されていた。例えば、一八五〇年に建設されたクライストチャーチは、ニュージーランドの「田園都市」と呼ばれていたし、シカゴもまたみずから「田園都市」と称していた。F・J・オズボーンによれば、公式名称として「田園都市」の名が与えられた最初の場所は、一八六九年(明治二年)にA・J・スチュアートに

よつて創設されたニューヨーク郊外のロングアイランドであり、一九〇〇年までにアメリカには、このほかに「田園都市」と名付けられた九つの村と一つの小さな町があったといふ。

ハワードは「田園ガーデンからなる都市」であると同時に、「田園ガーデンのなかにある都市」を意味するものとして、この「田園都市」という言葉に新しい意味を与えた。ハワードの「田園都市」の基本理念は、「都市と農村の結婚」「農村にある心身の健康と活動性」と、都市の知識と技術上の便益と政治的協同の結婚」であり、この結婚の手段が「田園都市」の建設だったのである。

ハワードは、『明日の田園都市』のなかで、その理念を次のように述べている。

『都市』磁石も、『農村』磁石も、いずれも自然の全計画と目的を表現するものではない。人間社会と自然の美しさがともに享受されるように工夫されなければならない。二つの磁石はひとつにならなければならない。男と女が異なる資質と能力によつて互いに補い合つていふように、都市と農村も相互に補完しなければならぬ。都市は社会の象徴であり、相互扶助と親密な協力の父たること、母たること、兄弟たることの象徴であり、人と人との間の広範な関係の象徴であり、広い拡大する共感の象徴であり、科学、芸術、文化、宗教の象徴である。そして農村は、神の人間に対する愛と思ひやりの象徴である。われわれの生存と所有のそのすべては農村に由来する。われわれの肉体は、それから作られ、それに還るのである。われわれはそれによつて養われ、それによつて着物を着、それによつて暖められ、住まふのである。』⁽²⁶⁾

「都市と農村は結婚しなければならぬ。そしてこの楽しい結合から新しい希望と新しい生活と新しい文明が生まれてくるであらう。』⁽²⁷⁾

「しばしばそう思ひ込まれていふように、都市生活と農村生活の二者択一があるのではなく、実際は第三の選択 すなわち極めて精力的で活動的な都市生活のあらゆる利点と農村のすべての美しさと楽しさが完全に融合した が存在するのである。』⁽²⁸⁾

井上友一博士、生江孝之氏ら内務省地方局のスタッフが、こうした西欧諸国における田園都市建設運動の進展に深い関心を寄せ、実地調査の上、「徹宵、非常なる努力を以て」内務省地方局有志編の報告書『田園都市』を取りまとめたのは、すでに述べたように、ハワードの『明日の田園都市』が公刊され、レッチワースの建設が開始されてから僅かに四、五年後の明治四十年（一九〇七年）のことであった。

それは、英国ならびに欧州大陸諸国における田園都市建設の最初の動きを詳細に分析、紹介するとともに、近代産業社会の発展がもたらす社会問題を鋭く分析し、日本の今後の都市づくり、農村づくりの方向について、多くの分析と提案を試みた貴重な歴史的文献であった。

言うまでもなく、明治四十年という年は、日本が明治三十七、八年の日露戦争に勝利した直後である。この頃、日本はある意味で、外交・内政の両面において重要な歴史的選択の岐路にさしかかりつつあった。明治三十八年のポーツマスの日露講和条約の調印をめぐって、これを屈辱的講和とする猛烈な反対運動が起り、日比谷では焼き討ち事件などの暴動が発生していた。明治三十九年には第一次西園寺内閣が成立翌四十年には足尾銅山の暴動が発生するなど、労働争議が激化し、産業化、近代化をめざす日本は、海外膨張、軍事大国への道を選ぶが、民生民力の安定充実に力を振り向けるべきが、戦後経営の難しい局面に立ち至っていたのである。

大平正芳の生まれた明治四十三年（一九一〇年）、当時のほとんど唯一といつてよい月刊総合雑誌『太陽』（博文館発行）が、「壹等国」と題する臨時増刊号（第十六巻第二号）を一月に出しているが、「一等国」という言葉は日露戦争後の時代の流行語のひとつであった。明治維新以来の「殖産興業」「富国強兵」による「追いつき、追い越せ」が、日露戦争の勝利によって一応達成され、日本もようやく「一等国」なみ、先進国なみになったという自信とうぬぼれがその背景にあった。だが、他方では、「一等国」とうぬぼれるのはまだ早い、と自重自戒を求める声も決して少なくなかった。

例えば、森鷗外は同じ年に『普請中』という短編を書いているが、そのなかで主人公に「あたりはひっそりとして人気がない。唯少し隔だつたところから騒がしい物音がするばかりである。……外に板囲いのあるのを思い合わせて、普請中だなと思う」と述べさせたのち「日本はまだそんなに進んでいないからなあ。日本はまだ普請中だ」と語らせている。

日本で最初の田園都市に関する内務省地方局の報告書は、まさにこの明治末期の日本の普請中に書かれたものであり、「一等国」日本の現状と将来をめぐって論議が高まりつつある時代の背景のなかで書かれたものであった。そのなかで、この報告書の執筆者たちは、第一に西欧先進国の産業化、近代化のもたらす社会病理現象、特に都市と農村の分裂、人間的連帯の喪失、家族、地域社会などの解体現象に危機意識をもって取り組み、第二に日本の文化、社会の特質を生かしつつ、日本の普請の方向を見定め、そのデザインを描こうと努めていたのである。この報告書はその目的を次のように述べていた。

「都市を重んぜんか、また農村を主とせんか。二者ともに一得一失あるをまぬがれずして、そのひとつに偏重するは、すなわちそのひとつを曠廢せしむるにほかならず。泰西の諸国は爾來幾多の経験を経て、これらの問題を講究することすでに多年、最近におよびては、ついに兩者のひとしくゆるがせにすべからざるを認め、都市農村の兩者かならず相須つべきことを唱えて、ここに二者の複本位論を生じ、中央と地方とを通じて、いっせいに全局の進暢と、相互の調和とを完つするをば、一國興新の第一要義となすに至りぬ」(報告書、一二二頁)

『田園都市』『花園都市』の名は、絶えてわが邦に聞かざりしところなり。されどその実体につきてこれを言わば、なんぞかならずしもひとつの「田園都市」なしといわんや、あにまた一種の「花園都市」なるものなしとせんや。これを当年平安の旧都に見ずや、山紫水明もつとも天然の風光に富み、春は東山の桜狩り、人はさながらに雲霞のうちを行くがごとく、秋は西山の紅葉二月の花よりも紅にして、路行く人

の節を停めしむ。清栄玉のごとき加茂川の水、翠緑滴るがごとき吉田の杜、かかる自然の風趣は、それいかばかり市人を塵胸を洗い去りて、一段の爽氣を与ふるなからんか」(同報告書、三五―頁)

日露戦争後の明治四十年代の世相と、高度経済成長後の昭和四十年代の世相とを単純に比較することは勿論できない。しかし、明治四十年代の空気を吸って生まれ、大蔵省入省とともにこの内務省地方局有志編の報告書『田園都市』を手にした大平にとって、この報告書の印象は強烈なものがあつたと思われる。それはトニーの近代産業社会批判の視点とも交錯しながら、「近代を超える」という大平の基本的問題意識へと連なつていったのである。

都市と農村はここでも対立した二極として取り扱われてはいない。それは近代社会の二つの中心として、ともに相互に補完し合い、調和すべきものとして認識されている。ここにも大平の「楢田の哲学」のいわば曲線的思考法が見られるといつてよいであらう。

大平の時代認識のなかにあつて、都市と農村が二つの中心となつて描きだす楢田軌道のなかに、人間的連帯の回復を可能にする「近代を超える社会」の姿が浮かび上がってくるように、「近代」と「前近代」(中世)もまた、トニーやトマス・アキィナスを通じて中世経済社会史を探究した大平にとっては決して対立する二極ではなかつた。「近代を超える」ための楢田軌道は、大平の思考のなかにあつては、むしろ「近代」と「前近代」(中世)という二つの中心によつて描きだされるものであつた。

五、老子とトマス・アキィナス 東西の自然法思想の融合

大平の理解した市場経済の原理やアダム・スミスの「神の見えざる手」は、決して「利欲」のみを求めてやまない競争原理ではなく、むしろ自然法と深く結び付いた神の摂理、従つて人間の高い道徳性と結び

付いたものであった。大平のいう「価値」は、単なる「経済的価値」ではなかつたのである。大平のいう「価値」は「経済的価値」をはるかに越える、より高い、より包括的な「人間的価値」であった。政治はこの「人間的価値」の実現をめざすべきものであつて、「経済的価値」のみの追求によつてかえつて「人間的価値」の破壊をもたらすようなことを断じてしてはならない。この「人間的価値」の描きだす精円軌道こそ大平の政治哲学の描く「道」だつたのである。

大平の自由主義の経済学と保守主義の政治学の両者は、⁽²⁸⁾ 実にこの深い自然法理解を基礎とするものであつたが、本論文ではその点についての考察は他の筆者に委ねて、これ以上立ち入ることはしない。

まことに、道とは、老子のいうように、「道の道とすべきは常の道にあらず」である。万物は流転する。それが宇宙の根本法則であり、普遍存在としての道の運動形式である。この転変する巨大な動きのなかにあつて、眇たる人間の私意がなにほどの力を持つてあろうか。むしろ進んで変化のなかに身を投じ、必然の動きに順応し、一体化せよ。そこに限りなく自由の境地が開けてくるであらう。物事をすべて変化において捉える。これが老子の自然観であり宇宙観、人間観、世界観であつた。

老子は言う。「嘗えいほく碗をんを載おせ一をを抱かき、よく離はなれることなからんか。氣を專せんにして柔を致し、よく嬰兒たらんか。玄覽をんを濂てん除じよし、よく疵しなからんか。民を愛し国を治め、よく無為むゐなからんか。天門てんもん開闢かいびくして、よく雌めたらんか。明白めいはく四達しだつして、よく無知むちならんか。これを生なじ、これを畜ちくつ。生じて有あせず、なして恃たのまず、長ながじて宰さいせず。これを玄德えい徳と謂いつ」⁽²⁹⁾

その意味するところは、「一面的なものの見方を捨て去つて、道から離れずにいるだろうか。自然の氣を保つて柔弱なること、嬰兒のようであらうか。知識を万能とする迷いを拭い去るに、欠けるところはないだろうか。民を愛し国を治めるについて、無為を守っているだろうか。自然の変化のなかにあつて、受身の立場に徹しているだろうか。事物の理を究めるにあつて、知の限界をわきまえているだ

るうか。道は万物を生み、万物を養う。万物を現象させながらもその現象を固定させず、存在させながらも功を誇らず、完成させながらも支配しない。これが道の底知れぬ徳である」ということである。

老子の言う道とは、東洋の自然法思想といつてもよいものである。大平はトマス・アクィナスの自然法思想理解を通じて、東西文化の根底にある深い共通性を発見したのである。

トニーも指摘しているように、中世の経済道徳の哲学的根拠となっていたものが自然法思想であったことは言うまでもない。「人間が作るすべての法は、それが自然の法から導き出される限りにおいてのみ、法的な性格を持つ。だがもしどこかで、それが自然の法と矛盾するならば、それは直ちに法ではなくなり、法の墮落に過ぎなくなる」とトマス・アクィナスの『神学大全』は主張する。³¹

トニーは、『獲得社会』（一九二二年）のうちに書いた『宗教と資本主義の興隆』のなかで、中世の神学体系が経済社会理論に与えた大きな影響について次のように分析している。「後世の重商主義者の思想が貨幣や価格や利子などに関するスコラ哲学者の理論に負うところは、かなり大きい。しかし、中世の著作者たちが、経済理論の技術的な点に与えた特殊な貢献よりもさらに大切なのは、その前提となった考え方であった。かれらの根本的な考え方には二つのものがあって、そのどちらも、十六、十七世紀の社会思想には深い影響を与えることになったものである。すなわち一つは、経済的な利害は人生の本務である救いに従属しているものだという考え方であり、二つは、経済的行為は人格的行為の一面であるから、それはその他の側面と同じく、道徳の規範に拘束されている、という考え方である。というのはそれなくしてひとつとは自己を支えることができず、おたがいに助け合うこともできないからである。聖トマスもいっただように、賢明な統治者は、国家の基礎を置くにあたって、その国の天然資源を考慮に入れるものだ。しかし、経済的な動機というものはうさんくさいものだ。それは力強い欲望であるから、ひとつとはこれを恐れるのだが、またこれを称賛するほど、ひとつとは下賤でもない。他の強い情欲と同じく、必要なのは

手綱をゆるめないうで、これを抑制することであると考えられた。中世の経済理論では、道徳的目的に関連のないような経済的な行動はまったく考えられていない。射利心は一定の計量可能な力であつて、他の自然力と同じく、不可避的な自明の所与として受入れられなければならない、という仮定の上に、一つの社会科学を基礎づけることは、中世の思想家にとつては、非合理的な、非道徳的なことに思われたのであろう。それは、鬭争欲や性欲のような必要な人間の属性の無拘束な発動をば社会哲学の前提とすることが合理的でもなければ道徳的でもないのとはほぼ同じことだと考えられたわけである。外なるものは内なるもののためにある、というのが掟である。経済財は手段にすぎない。あたかもわれわれがそれによつて、淨福へと赴くのを助けられる手段のようなものである。

『この世の幸福を望むのは法にかなつたことである。が、あたかもこれに安住しているかのようにそれを第一義的なものとせず、どこまでもそれはわれわれの肉体の生活を支え徳行の手段として役立つ限りにおいて、祝福の助けとなるものだ』と、考えなければならぬ。『聖アントニーのいうように、富は人間のためにあるものであり、人間が富のためにあるのではないのである。』³²

大平の政治哲学は思想的に見ると、老子とトマス・アキナスという東西二つの自然法思想を中心とする楕円の哲学であつた。しかし、大平の政治哲学のなかの楕円はそれだけではない。競争と協調、個人と集団、世俗と宗教、自由と規律、部分と全体など、実にさまざまな対概念が、大平の意識のなかでは緊張と調和のなかで楕円軌道を描きつつ芸術的に均衡している。

しかし、そこにも一つ時間軸という複雑な構造を入れるとき、大平の政治哲学は楕円軌道を描きながら時間軸にそつて螺旋状の運動を続けていく「永遠の今」となる。前近代（中世） 近代 超近代は単純な単線的構造ではなく、螺旋状につながる楕円軌道をなすものとして認識されている。そしてその螺旋軌道はただ循環しつづけているのではなく、ゆっくりと究極の人間の価値である真善美 神概念に向かつて

上昇していくのである。

それは古生物学者ティヤール・ド・シャルダンの『現象としての人間』のなかの、「終局の点」に限りなく近づき、収斂していくという「人格化する宇宙」のイメージにも似ている。

ティヤールは言う。「精神圏が、そして最も一般的に宇宙が、構造的に単に閉ざされているというだけでなく、また一点に集中している全体であることをも理解する場合だけ、われわれのすべての難題とすべての反撥は全体と人格との対立に関しては消滅する。空間＝時間は意識を含み、生み出すから、必然的に収斂する性質を持つ。だから適当な方向にむかう際限のない層は、ある「点」それを「終局の点」の点」と名づける。へいわばうなるようにして進むはずであり、その点がすべての層を一つに融合させ、それぞれの自己のうちで完成させる。……宇宙を思考し、受入れ、宇宙に働きかけるためには、逆の方向ではなく、われわれの魂の彼岸を観察しなければならない。精神発生の立場からすれば、時間と空間が実際に人格化されるようになる。というよりもむしろ人格を超えたものになる。宇宙的なものと人格的なもの（つまり「中心の定まったもの」）は矛盾しあうのではなく、同一方向にむかって交叉し、互いに同時に頂点に達する。

従って、われわれの存在と精神圏の延長を非人格的なものの側に探し求めることは誤っている。未来の宇宙は終局の点において人格を超えるものにほかならないであろう⁽³³⁾。

恐らく大平はこの古生物学者ティヤールの卓越した見識に、深い共感を示すことであろう。しかしなお、大平のなかの「老子」はこう呟くのではあるまいか。「どうして西欧的理性というものは、すべてを単一の点に収斂させないと気がすまないのでしょうか。人格を超えるものを、人格は知ることができない。ティヤールには『無知の知』がまだまだ不足しているのではないか。宇宙は「終局の点」にむかって収斂しつつあるというよりは、しずかに『無』と『空』のなかをゆっくりと循環し、旋回しているのではないか。

そしてそれこそ玄妙なる道であり、『道の道とすべきは、常の道にあらず』『老子』といつこのほんとうの意味なのではないか」
「天地の間は、それ囊籥たぐやくの如きか。虚にして屈せず、動きていよいよ出ず。多言はしばしば窮す。中を守るに如かず」だ、と。

- (1) 大平正芳回想録刊行会編『大平正芳回想録 資料編』(一九八二年)三九二頁
- (2) 「良賈深蔵若虚 君子盛徳容貌若愚」史記「老子伝」
- (3) 大平正芳著『素顔の代議士』(二十世紀社、一九五六年)九〇一〇頁
- (4) 『老子』(徳聞書房、一九七九年)三六〇三七頁
- (5) 「有老人、含哺鼓腹擊壤而歌曰……」『十八史略』「五帝・帝堯陶唐氏」
- (6) 大平正芳著『私の履歴書』(日本経済新聞社、一九七八年)四九頁
- (7) 張養浩『為政三部書』(安岡正篤訳、明德出版社、一九八二年)三二二三頁
- (8) 大平正芳記念財団編著『大平志げ子夫人を偲ぶ』(一九九二年)二二三二頁
- (9) 前掲書、『私の履歴書』三〇〇三二頁
- (10) 宮沢健一「大平哲学のふるさと」(大平正芳回想録刊行会編『大平正芳回想録 追想編』所収(一九八二年)三六七頁)
- (11) R.H. Tawney: The Acquisitive Society, G. Bell and Sons LTD. 1952
- (12) 大平正芳「職分社会と同業組合」(前掲書、『大平正芳回想録 資料編』所収)一〇三二一〇四頁
- (13) 前掲書、『大平正芳回想録 資料編』一〇四一〇五頁
- (14) 前掲書、『大平正芳回想録 資料編』一〇五頁

- (15) トーニー著『宗教と資本主義の興隆』（岩波書店、一九六二年）下巻、二一六頁
- (16) S. Thomae Aquinatis : Summa Theologiae, I a 2ae, quae 91, art. 1 and 2. (トマス・アクィナス『神学大全』、創文社、一九六〇年)
- (17) 前掲書、『私の履歴書』二二〇～二三頁
- (18) 前掲書、『大平正芳回想録』資料編、一〇五～一〇六頁
- (19) 前掲書、『大平正芳回想録』資料編、二〇六頁
- (20) 前掲書、『大平正芳回想録』資料編、二〇八頁
- (21) 前掲書、『大平正芳回想録』資料編、二一〇～二二二頁
- (22) 前掲書、『大平正芳回想録』資料編、一〇五頁
- (23) 大平総理の政策研究会報告書 2、田園都市構想研究グループ『田園都市国家構想』（大蔵省印刷局、一九八〇年）
- (24) 内務省地方局有志編・香山健一解説『田園都市と日本人』（講談社学術文庫、一九八一年）
- (25) Ebenezer Howard : Garden Cities of Tomorrow, The Town and Country Planning Association. (エベネツアー・ハワード『明日の田園都市』長素連訳、鹿島出版会、一九七五年)
- (26) 前掲書、『明日の田園都市』八三頁
- (27) 前掲書、『明日の田園都市』八四頁
- (28) 前掲書、『明日の田園都市』八四頁
- (29) すでに昭和二十八年、大平は「安くつく政府」と題して次のように述べている。
- 「要するに財政の哲理は税金を少くすることと公金を大切に使う事に尽きるといっても過言ではない。アダム・スミスが、国家の機能を出来る丈制限して、市民社会により多くの自由を享受させようとした事や、近く

はアイゼンハワー大統領が安くつく政府 (Cheap government) を作り上げる事に腐心している事も、煎じつめればこの財政の哲理を實踐に移そうという苦心に他ならないのだ。

ところが満州事変以後今日に到る迄のわが国の財政は、中央といわず地方といわず、膨張に膨張を重ねて来たり、税金は益々重くなり、全国津々浦々に怨嗟の声を聞くようになって来た。誠に悲しむべき事である。これからの政治は、この弊風を如何にして是正して安い政府をどうして作り上げるかという事がその悲願であらねばならないと私は思う。」(前掲書、『素顔の代議士』一〇六―一〇七頁)

また、保守合同の行われた昭和三十年一月に、既に大平は保守対立の無意味なることを主張した「保守と革新」のなかで次のように論じている。

「今日の日本における保守と革新の対立は、今日のようなあり方では全く無意味であつて、一片の戯画にしかすぎないとみられよう。いち早く両者は共通の分母を掘り求めて、その上で実効性ある論議を展開することが何よりも肝心である。」(前掲書、『素顔の代議士』二〇二頁)

こうした大平の自由主義、保守主義の哲学については、別にあらためて詳細に論ずることとしたい。

- (30) 前掲書、『老子』四八頁
- (31) 前掲書、『神学大全』、第一部の二、第四十五論題、第二項
- (32) 前掲書、『宗教と資本主義の興隆』六八―六九頁
- (33) Pierre Teilhard de Chardin : Le Phenomene Humain, Edit. du Seuil, Paris, 1955. (ティヤール・ド・シャルダン)『現象としての人間』、美田稔訳、みすず書房、一九六四年)、三〇二―三〇三頁
- (34) 前掲書、『老子』四二頁